

いずみさの昔と今 第289回

「泉佐野に残る家相図①」

今回から3回にわたり、1月18日(土)より開催の令和元年度冬季企画展「泉佐野の家相図―江戸時代の占いブーム―」に関する話をします。

泉佐野市内には数多くの古民家が今なお残っており、本市を縦断し大阪と熊野を繋ぐ熊野街道沿いの長滝の喜多家、樫井の奥家住宅(重要文化財)はその代表例です。現在では珍しい日本建築には、採光・動線・収納・水場など数多くの工夫がなされています。これらの工夫には暮らしの知恵だけではなく占いによる吉凶、すなわち風水の知識も取り入れられていました。今回は日本における風水の始まりについて紹介します。

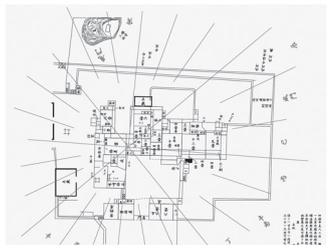
家相が誕生する礎となった風水は、古代中国で成立した地形占(地相)を含む人の住む環境や空間に対する思想の一つです。その根幹には、大地の気の流れと土地の相(吉か凶か、水気が多いかなど)を判断し、そこに住む人への災いを防ぎ、幸福を招こうという考えがあります。人々が暮らす空間を「陽宅」、亡くなった祖霊が住まう場所(墓所など)を「陰宅」としてそれぞれを風水で診断をして、相の良い場に建てることでそこに

住む人々やその子孫の攘災招福を願ったのです。例えば古代中国では風水や易・八卦で地相を占い、皇帝の住む宮殿を建てたことが明らかになっています。

この風水は古代日本においても重要でした。日本で史料上に確認できる風水については、「日本書紀」推古天皇10(603)年に僧観勒が「曆書(こよみのためし)・天文・地理書」(てんもん・ちりのよみ)・「遁甲・方術書」(とんこう・ほうじゆつのおふみ)を日本に伝えたという記述が残されています。この内の「地理書」が風水書です。「風水」は古代日本では「地理」・「堪輿」という名で呼ばれ、主に陰陽寮(天文観測・曆の作成・占い・時計計測を行う国の役所)の陰陽師(占筮・相地・易・八卦、土地占)「風水のこと」が扱いました。観勒は、中国唐代に成立したとされる風水とは別の、陰陽五行説と習合する以前の風水を持ち込んだと考えられています。

天武・天智朝期、日本は国家形成に最善を尽くすようになり、当時の王権(皇帝・天皇)は、時間と空間を支配することを第一義としており、中国では時間は暦、空間は占いを

活用することで支配していることを示そうとしました。日本も同様と思われ、曆を作るための天文観測、日時の計算が始められました。風水術は、この空間支配を示すために使用されたと考えられます。藤原京、平城京、平安京は全て風水術で土地を占い、立地を計算して作成されています(「続日本紀」ほか)。そこには、風水術を都選定の根拠に利用する権威付けの意図が垣間見えます。今回は四神相応と風水について扱います。



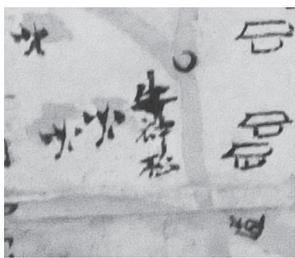
▲中庄新川家に残された家相図トレース

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの ☎469-7140 Fax469-7141 休館日 月曜日、祝日(祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館) 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) 入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑥ ～絵図編(5)「新道出牛神」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介し、

問合せ先 文化財保護課



▲日根野村絵図に記された「牛神松」

日根野にある「新道出牛神(しんどうでうしがみ)」は、約700年前に描かれた「日根野村絵図」の「牛神松」の場所と推定されています。農家が飼育している牛の無事息災を祈願してまつられた民間信仰の神で、「牛神さん」と呼ばれて親しまれています。かつては7月7日の七夕に牛神祭りが行われていましたが、今でも新道出では祭りの日(現在は8月7日に開催)には供物をし、清掃を実施しています。

現在の境内には社殿はなく、祠と近世の石灯籠のみが残っています。絵図には「牛神松」と書かれていますが、当時の松は枯れてしまったと言われ、現在は幸い自生した松が育っています。牛神さんの横にある木は「クスドリゲ」と言う山口県や和歌山県以南の海岸沿いに生える高木で、葉からトゲが出ています。泉佐野市内では、この1本しか見つかっていない貴重な木となっています。



※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用(原本は宮内庁書陵部所蔵)